

# 英語の時制と現在完了形

樋口 万里子

## 1.0. はじめに

現在完了形を過去表現の一種とする説明が昨今一般化しているが、本稿の目的は、現在完了形は、構文全体としては、過去分詞の事態に何らかの影響を受けた「現時点での状況」を表すもので、現在時制の一種だと論じ、これを認知言語理論的に裏付けることである。換言すれば、話者の意図する現在の状況の特徴を伝える為に、これ迄に生起し完結した出来事の中から情報価値の高い出来事が選ばれて過去分詞化され、それを利用することにより談話の場で間接的に伝わる含意として理解される結果状況が、現在当てはまっていることを表すのが、現在完了形だと主張したい。従来、現在完了形が不可思議な構文とされ英語の文法体系でうまく扱えなかった根本的原因是、関連概念の曖昧さや時制を含む構成素意味分析の不完全さはもとより、現在完了形が過去を表すという見解が主流だったことにあると言えるだろう。本稿では、Langacker (1991: 211-225) が完了形に関し概略的に示した方向性を、特に時制との関わりという観点から洗い直し、認知言語学的手法で肉付けして、具体的事例を通して謎の一つ一つを解きほぐしながら、新たな視点を加え、現在完了形のメカニズムの明確化を試みる。

現在完了形が時制文の一つであることには、異論はないと思われる。英語の動詞に備わっている時制形態素には、過去と現在の二つしかなく、現在完了形では、紛れもなく have に付随する現在時制しかない。現在完了形の場合、[have + 過去分詞] という一体化した構文に、時制の形態素が備わっていると

考えたとしても、そうであることに変わりはない。だとすれば、その現在時制を表す形態素が、現在完了形の場合だけ特別に、過去の出来事を表すと考えるのは、あまり自然ではない。そもそも英語の時制というのは、Harder(1996)も指摘しているように、情報の受け手に対し、(non-modal に限れば現実の)時間軸のどこかに事態の生起位置を確認させる意味機能を持つ。その証拠に、例えば He was sick 等は、いつの時点の話なのかということが、発話の時空において話し手と聞き手の間で了解されていない限りは、発言として不完全に感じられる。従って、現在完了形が、仮に過去時制表現の一種だとしたら、その位置を情報の受け手が諒解できなければならないはずである。ところが、\*He has come yesterday 等が容認されないことから分かるように、過去の出来事の位置を確認させる時間副詞とは共起できず、現在完了形が表すとされてきた過去の出来事の位置は特定できない。Inoue(1979)は、現在完了形は「時間的位置を確認できないタイプの過去の出来事を表す」と主張するが、それは明らかに事態位置の確認を要求する英語の時制のあり方とは矛盾している。

また、現在完了が表すのは、単なる過去の出来事ではなく、現在に関連性のある(Currently Relevant な)過去の出来事とも言われているが、時制が完了形の時だけ特別に関連性を表すと言うのであれば、なぜそうなるのかを先に説明する必要があるだろう。関連性という点についても、多くの先行研究が指摘しているように、そもそも我々の発話は、単純過去形であれ何であれ、発話時現在の談話において何らかの関連性が認められているからこそ成り立つ筈であり、明確な定義がない限り、関連性を現在完了形だけの特性と考えるのは、本質的に無理がある。その上、過去の出来事を意味的に担っていると目される現在完了形の過去分詞の方は、修飾機能に特化した動詞の派生形式であり、Langacker の(1991 : 223)認知言語学の枠組みでも atemporal とされ、基本的には事態の時間的生起位置を示す機能はない。この様に、現在完了形を過去表

現の一種とする見解は、矛盾と謎に満ちている。謎だらけではあっても、基本的構文として、使い方についての学習者への説明の必要性や要請度が高く、さまざまなのが曖昧なままに研究が進んだのかもしれない。

本稿の主張は、平たく言えば、例えば I have had lunch は、昼食を取った動作そのものと言うよりは、例えば食べた結果としての「まだ空腹でない等という状態」の方が描写全体の核であり、だからこそ、食行動の時間位置を特定する副詞と衝突を起こすということである。しかしながら、Comrie(1985: 32-35)の様に、現在完了形を現在時制表現の一つと見なすことに抵抗を覚えたり、多くの研究者の様に、謎はひとまず置いておいて過去表現の一つに分類したりしてきたことにも、それなりの理由はあったかもしれない。まず、have の意味は抽象度が高く、存在が手に取るようには通常感じられにくいことが挙げられる。また、現在完了を、昆虫採集の標本の様に、使用の場から切離して考察が進められたことも一因しているだろう。現在完了形の文を文脈から切り離すと、have の表す状況の意味は空気の様に見えにくくなり、相対的に過去分詞の意味情報だけが目立ってしまうのだ。というのも、現在完了形の have が表すのは、過去分詞の情報を利用して、談話の流れにおいて含意的に理解される発話時点の状況だからである。過去分詞は、本来その含意を引き出す材料にすぎないのだが、その結果、現在の状態がどういう風に影響を受けているかについては、専ら文脈や使用状況に依存しており、使用状況によって様々な場合がある。それ故、使用状況や文脈から切離すと空気の様にも漠としたものとなり、存在感が薄い。それが現在完了形を謎めいたものに見せてしまったのではないだろうか。しかし、風船に詰め込んだり真空と比較したりして空気の存在を確かめることが可能であるように、いくつかの方法で、have の意味の存在や意味機能は検証可能である。本稿では談話の流れに着目し、have の表す意味を、具体例を通して捉えてみたい。

過去分詞の方が目立つ原因は、勿論 have の存在感の薄さだけでもない。I like fried chicken の fried では、誰かが揚げたに違いないとしても、動作の主体が表立って意識されることはないのに対し、現在完了形の過去分詞の場合、実際に起きた出来事が、主体や対象と共に丸ごと具体的に意識され直結している。人間の興味関心が活動や出来事に向くのは極自然なことであり、過去分詞の表す出来事が、過去形で表された出来事と同じくらい情報価値が高く感じられる場合も多い。しかし、現在完了形が全体で意味するのは、結局その出来事の結果もたらされたり影響を受けたりしている現在の状況であり、使用状況・文脈における含意である。それが文法化された構文なのだとは本稿では考えている。Langacker(1991: 221)も、完了形は最も難しい構文だと言っているが、それはこのような事情によるものと思われる。現在完了が何らかの形で現在と過去の両方を表現しているという、Comrie(1985: 35)の見解に異論はないが、ここではその二つがどういう形で組み合わさっているかも明らかにしたい。その為には現在完了形の中核部分である have と過去分詞の、完了構文におけるそれぞれの意味機能を洗い出し、更に完了構文自体と現在時制がどう関わっているかを明確にする必要がある。

そこで本稿では、認知的・機能文法的見地から、まず、次章で現在完了形を過去表現の一種と見なす主張のいくつかの論拠の問題点を指摘し、そこに浮かび上がる、現在完了形の have の表す、見えにくいけれども存在する意味を捉える。その上で、Langacker(1991: 211-225)が示した完了形を捉える糸口を突破口として、これまでも指摘されてきた完了形の使用制限を再検討する。次に3章で、過去分詞の一般的機能との整合性を捉えつつ、現在完了形過去分詞のこれまであまり注目されなかった側面に着目することによって、現在完了形の文法上の性質、特に副詞との共起関係の制約の原理が見えてくることを示す。更に4章で、時制に関する根本的問題点を、認知的・機能文法的見地から洗い

流し、現在完了形における時制の機能を捉える。

本稿ではこの様に現在完了をパーツに分解して分析する訳だが、構成素一つ一つの典型的意味を単純に足したものと考えている訳ではない。現在完了は、あくまでイディオムのように、まとまって一つの働きを持つ構文である。完了形の *have* と本動詞の *have* も、典型的な形容詞的用法の過去分詞と完了形の過去分詞も、それぞれ振る舞いはかなり異なる。従って、完了形を *have* と過去分詞に分解した分析は誤りだという Michealis(1998)のような見解もある。確かに水素と酸素を化学合成すれば、2つの気体を足したものとかけ離れたような液体の水になる訳で、水の性質を水素または酸素に単純に求めることには無理がある。しかし、その他の化合物である、 $H_2O$ 、 $HCl$ 、 $OH$ 、 $H_2$ 等の様々な分子に存在する水素に共通の性質というのは当然あり、完了形の *have* や過去分詞だけがその他の様々な *have* および過去分詞一般と全く異なるというのも考えにくい。He kicked a bucket 等のイディオムも、一説によれば、文字通りの意味の使われ方が「命を落とした」状況と関わりを持って定着したと言われており、イディオムとしての意味と文字通りの意味は全く無関係でもない。水素と酸素の分子が化合するにはそれなりのメカニズムがあるように、現在時制形態素を備えた *have* に過去分詞が並んだ現在完了形として、英語独特の特定の意味機能を果たすようになったことには、それぞれの意味機能の性質や英語という言葉での事情など、いくつかの要因があると思われる。それらを解明することにより、英語の現在完了形特有のさまざまな制約を生み出しているメカニズムを、ここでは明らかにしていきたい。

## 2.0. 現在完了形の *have* の表す状況

### 2.1. *be gone* と *have gone*

まずここでは、現在完了形を過去の出来事の表現とする見解の一般化に影響

力を持ったと思われる、Bybee et al.(1994:65)の論拠を検証してみたい。Nedyalkov and Jaxontov(1988)の指摘の中に、「(1a)の still は(1b)の still とは異なり「まだ」の意味では使えない」というくだりがある。

(1a) He has still gone.

(1b) He is still gone.

Bybee et al. はこれを受け、(1b)は過去の出来事の結果状態を表すのに対し、(1a)は過去の出来事そのものを指すとして、現在完了形を、過去を表す表現の一種と捉えた。その証拠として、だからこそ(1a)の still の意味が、「まだ」ではなく、I still insist that he has gone のような「それでもなお」の意味と解釈されるのだと述べている。確かに(1b)は、現在未だ続いている眼前の状況を直接的に述べているのに対し、(1a)における眼前の状況は、文脈なしではあまりに漠然としており、空気の様に見えにくい。従って、文脈なしで(2a)だけから読みとれる情報は、過去分詞が表す出来事の情報だけに見えるし、少なくともそれだけが圧倒的に優勢である。

(2a) He has gone.

(2b) He is gone.

しかしながら、(1a)の still が、「未だ」の意味に解釈できないのは、(1a)が「状態ではなく過去の出来事を表しているから」ではなく、実は(1a)が表す状態が「終わりうる性質を持たないから」である。例えば、He is still dead (彼は未だ死んでいる)等の様に、可逆的でない出来事を still で修飾すると、生き返る事があり得るような特殊な文脈や、比喩的にとても疲れた状態を指す場合等でない限りは、基本的にはおかしな文か、又は I still insist that he is dead の意となる。(2b)の gone はかなり形容詞化の度合いが強く、(2b)は単に「現在彼がいない状況」を表し、彼が帰ってくれば終わる状況であり、帰って来ることがあり得る場合にも多く用いられる。それに対し(2a)の状況には、

ある意味、本質的に明確な終わりが考えにくい。なぜならば現在完了形は、have に表される状況とは別の、主語を主体とする特定の出来事を背景に備えており、その結果状況を表すので、その結果状況としては、直接・間接を問わなければ、様々な場合が考えられるからである。彼が去った結果、話者の心にぽっかりと穴が空いているだとか、悪魔払いをして平穏な日々が続いているなど、ポテンシャルとしては未来永劫続き得る。I have had lunch も、食べたことがあるという意味では、特にその状態には明確な終わりはない。(1a)の still が「それでも尚」の意味に解釈されるのは、He has gone の主張という発話行為の validity が still の修飾対象であれば、終わりうる状況として解釈可能だからである。

例えば(3)の場合、「レポートに目を通した結果としての、Jo がレポートの内容を知っているという状態」には、基本的に明確な終わりは認識しにくい。

(3) Jo has gone through the report.

但し、その状態も Jo が死ねば終わりになると感じられるかもしれない。Chomsky (1971 : 212-213)が(4)に関し、「主語即ち Einstein が存命中であることが前提とされている」と述べるのは、その故であろう。

(4) Einstein has visited Princeton.

ところが、Lakoff (1970)、McCawley (1971)、Inoue (1979)、Declerck (1991)、川瀬(1999)その他多くでも指摘されているように、実際には現在完了の主語が生きていなければならないということはない。母の死を嘆き悲しんでいる人が My mother has died と言うことにいささかの非文性もない<sup>1</sup>。例えば、(5a)の Shakespeare は誰もが知る16世紀末に活躍した劇作家を指すが、(5a)も適切な文であり得る。

<sup>1</sup> 因みに、My mother has died は筆者が先ほど見ていた「Chips 先生さようなら」という映画の登場人物の台詞として出てきた。

(5a) Shakespeare has written impressive dramas.

(5b) Shakespeare has quarreled with his contemporaries.

それは、シェイクスピアが書いた感動的な劇が後生に世代を越えて引き継がれ、今の人々にも影響を及ぼしていることが十分考えられるからである。しばしば(5a)と比較される(5b)が非文なのは、とりもなおさず、400年前の人物の口論という一過性の行為が、話者の表現したい現在の状況に影響を及ぼしている、または結果が残存している場合というのが非常に考えにくいからである。(3)が使われるのは確かに Jo が存命中の場合が多いかもしれないが、指紋やメモ書き等、Jo が目を通した何らかの形跡が現在に残っていて、それが談話に何らかの意味において貢献するのであれば、必ずしも Jo が生存していなくても(3)は問題なく使用可能である。即ち、主語を agent とする完了形の過去分詞の出来事は、様々な形で現在の状況に影響を与えることができ、ポテンシャルとしての結果状態は、本質的に終わる性質のものではなく、永く残存し得るのである。だからこそ、(1a)の still は(1b)の still の意味に解釈できないのである。

## 2.2. 様々なタイプの結果と現在完了のいくつかの用法

完了形の have の意味が文脈によって様々だということは、文脈なしでは定まりようのない漠然とした性質を有しているということでもある。現在完了形の過去分詞の事態の結果として様々な場合があることは、既に周知されていることでもある。(6)の様な例を取っても、Pat がステーキを食べた結果としては、文脈によっては Pat が満腹・満足であるとか、まだ空腹でない、steak が一切れ無くなっている、Pat が the steak の味を覚えている、という所謂結果状態の場合もある。

(6) Pat has eaten a steak.



また、Pat 自身の経験の場合もあれば、話者が Pat に食べられた経験があって 2 度と起きないように気をつけている、等々様々な場合もあり得る。just を補えば、ちょうど食べ終わった完了状態の場合もある。He has broken his leg も、「骨折の直接的結果として歩けない状態」であるとか、「既に完治後だが骨折の形跡や記憶が残っている等、経験」を語っていたり、Hot News として彼の授業欠席理由として使われたりする。過去分詞が状態動詞であったり頻度を表す副詞などが伴って habitual であったりすれば、継続的な意味で理解される場合などもある。これらがいわゆる「現在完了形のいくつかの用法」と称されているものだが、結局それは過去分詞に影響を受けた結果状態のあり方に様々な場合があるからであろう。逆に言えば、have が表しているのは、具体的にどういう状態を表しているかが、文脈や発話の場において読み取れるような性質の状態と言える。過去分詞に影響を受けた結果状態という点では共通しているが、文脈から切り離すと、その意味は schematic なものでしかないのである。

現在完了形の「完了、結果、経験、継続、或いは Hot News 用法」等という分類は、日本語に訳出する際にも違いが出てくるように、意味的・用法的な示差的特徴を反映していると言えるかもしれない。この事を、Michaelis(1998) は、それぞれが別の構文だという主張の傍証にしている程である<sup>2</sup>。確かにそれぞれの独立性はある程度認められるが、本稿では、先程述べた様に、過去に生じた出来事の現在への影響のあり方に様々な場合があるからだと考えている。(7a-c)はお馴染みの MaCawley(1971)の分類を Michaelis(1998)がアレンジしたものである。これは、過去分詞の事態のあり方による、影響のあり方の大まかなパターン分類とも言える。

---

<sup>2</sup> 後述するが、Michaelis (1998) では、何を以てこれらを別構文と捉えるかについての説明が不十分で、根拠が乏しい。

- (7a) The police have arrested the men responsible. (resultative)  
*The result of a past event obtains now. (i.e. the men are currently in custody).*
- (7b) Harry has visited his mother twice this week. (existential)  
*One or more events of a given type are arrayed within a present-inclusive time span.*
- (7c) Dick's store has been there for years. (continuative)  
*A state that began in the past obtains throughout a present-inclusive time span.* Michaelis (1998)
- (7d) Bush has met Blair. They talked about three hours yesterday.  
 (hot news)

先ず最初の結果用法というのは、Carey(1996)等の歴史的研究等でも述べられているように、最も古くからある完了形の典型的かつ基本的な用法である<sup>3</sup>。上記斜字体の説明部分からも分かるように、過去分詞の出来事の直接的な影響や結果の現在点での存在が、比較的明確に感じられる。つまり(7a)は、“*the men are currently in custody*”という状態を物語っており、その様な形で現在の状態が特徴づけられていると言える。

それに比べて2番目の existential (または経験用法) と呼ばれる(7b)の場合、Harryの行動によって現在の状態がどういう影響を受けているのか、即ちどういった意味での特徴付けがなされているかは、多分に文脈に依存している。特にこの場合の様に、文脈から切り離されていると、話者の発話意図としては様々な場合が考えられ、漠然としている。従って相対的に行動の方だけがどうしても目立ってしまい、(7b)の斜体部分の様な説明となってしまうので

<sup>3</sup> Carey (1996) によれば、英語の現在完了形は have と一部の動詞の過去分詞で表していた結果構文が他の動詞の場合にも広がって一般化したとされている。

あろう。しかし、(7b)が例えば母親を気遣う Harry の優しさを例示する為に使われたとすれば、これも、過去分詞の出来事の頻度や生起の有無によって、現在の主語の属性を特徴づけている場合だと考えられる。従って(7a)だけでなく(7b)の場合も、より間接的にはあれ、過去分詞の事態生起の何らかの結果として、現在の状態への何らかの特徴付けがなされている。

さて、上記2つの用法における過去分詞の事態には、perfective/imperfectiveのいずれのアスペクトの場合もあったが、3番目の継続用法には、過去分詞の事態アスペクトがimperfective(多くの場合所謂状態かまたは動作が繰り返し起こるhabitualである)、かつ期間を表す副詞が備わっている<sup>4</sup>。継続用法では、今も過去分詞の状態が続いているという解釈が自然であるが、それは実は含意であって、厳密に言えば、発話時直前には期間副詞に限定された事態の継続期間自体は終わっている。状態が発話時もその後も続くのであれば、まだその結果に言及はできないし、単に単純現在形の役回りとなる。過去分詞というのは、完結した事態の影響や結果の様を表すものだからである。そして「いつから」直前までかという期間情報が伴って初めて、過去分詞の事態が現在の状態を特徴づけるに足る情報価値を持つ。それ故、過去分詞がimperfectiveで期間が伴わない場合は、経験用法として解釈される。継続的に理解されるには期間情報がなければ、過去分詞の事態が現在の状態を特徴づけるに資するものとならないからである。例えば、He has known her since her childhoodのような場合も、期間情報は彼が彼女のことをどのくらい知っているかを物語り得る。これをHe has known herの様に外してしまうと経験として

<sup>4</sup> 動詞の表す事態というのは時間の流れにおいて捉えられる概念である。Perfective/imperfectiveというのは動詞のアスペクトと呼ばれる区分のもっとも大きなものである。Perfectiveというのは、この時間の流れにおいて変化が意識されるものであり、imperfectiveというのは変化が意識できない状態である。PerfectiveアスペクトはVendler(1967)の区分では、更にaccomplishment, achievement, activityに細分化されている。

理解され、例えば婉曲に性経験等として解釈される場合もある。(7c)の過去分詞も、for years という期間に修飾されることによってはじめて、Dick の商売が長い間存在し続けた実績であるとか、周りの人に知られた存在であるとか、歴史が長い等、Dick の店または何らかの現在の状況の特徴付けに貢献し得る情報価値を持つ。このように、継続用法と呼ばれる類の現在完了形の過去分詞は、期間限定によって現在の状態を特徴付けることができるのである。

さて、ここで気になるのが、4番目に付加して挙げた(7d)の様な、Hot News を表すとされるタイプの用法かもしれない。

(8a) Ann has left her job at the bank. She didn't like her boss.

(8b) Bill has had an accident. He fell off his bike last night.

(8c) Bush has met Blare. They talked more than 3 hours yesterday.

このタイプの現在完了形には、(8a-c)に示すように過去形表現が後続することも多いことから、Schwenter(1994)は、少なくともこのタイプの英語の現在完了形は、過去の出来事の現在における結果状態を表す他の用法と異なり、過去の出来事を表すと主張する。出来事がまだ起きたばかりであることに焦点があたっており、現在との関連性の高い過去の出来事を表すというのである。彼はヨーロッパ言語全般に見られる完了形は、「過去の出来事の現在における結果状態を表す用法」から「過去を表す用法」へと変遷する傾向にあり、この用法が英語の現在完了形の変遷の途上期を示すものだと考えている。

それは勿論考えられないことではないが、このタイプの現在完了形も、起きたばかりにせよ、本稿で言うような意味においては過去の出来事（つまり生起位置が過去に或る事態）を主に表しているとは言えない。このタイプでも yesterday 等の副詞とは共起できないし、過去分詞の出来事がまだ news value を持つうちでなければ使えない。それは、過去分詞の影響が感じられる状態に現在あることを示している。例えば(8c)は主語と目的語を伴った過去分詞の出

来事を、現在の社会状況や世界に影響を及ぼしているものとして、話者が感じていることを表す。(8a-c)の様な Hot News 用法とは、現在完了形の談話の出だし (Context Initial) に使えるということと、過去の事態が意味的に背景に組み込まれているという2つの側面が便利に働き、過去の背景説明へとスムーズに話を続ける transition として利用されている事例と考えられる。He was sick 等、過去形の情報は、出来事の時間的位置を確認する術がない限り、談話の出だしで使うと、とても唐突な感じがする。その点、現在完了形の場合、全く問題が生じない。これは I'm sick 等の単純現在形と同じく、現在完了形が全体では発話時の状態を表現していることを示している。Hot News 用法と認識される用法の場合の過去分詞の事態は、基本的に談話の参与者、特に聞き手にとって News 即ち、新しく情報価値の高いものであり、当事者の認識する世の中の状態の一部を更新されるという結果をもたらすものである。つまり、Hot News タイプの現在完了形も、過去分詞の事態に影響を与えられた、何らかの現在の話者を取り巻く状況を表していると言ってよい。

確かに、独語や仏語スペイン語等、ヨーロッパ言語全般に見られる現在完了形は、yesterday 等の副詞とも共起できることも多く、意味的に過去の出来事も表す場合も多いとされている。嶋崎(2004)の研究によれば、独語の現在完了形は、確かに、古高独語(750年頃から1050年頃まで)の時代の、「完了した事態の現在における結果状態を示す用法」に、「単なる過去を表す用法」が加わり、現代の特に口語では、過去を表す主力表現形式となった、という歴史的变化を遂げた。Drinka(2003)でも、have + 過去分詞という形式がヨーロッパ言語間で少なからず影響を及ぼしてきてきたことが、分析されている。しかし、だからといってそれだけで、英語の現在完了形も過去の出来事を表すようになると予測できるとは限らない。Drinkaの研究においても、英語はその動きの中では周辺部に属する。嶋崎(2004: 247)によれば、独語の中でも南ドイツの

方言では、過去を表す表現として現在完了形が著しく発達し、文語体においても現在完了形が使われるが、それでも現在完了形だけで物語を語り通すことはできないと言う。一方、英語の現在完了形は、古英語の時代からそれほどの変化は辿っておらず、中英語からは殆ど変化がない。英語では独語とは使用範囲の異なる単純現在形と単純過去形を有しており、現在分詞も発達し、進行形等、独語や仏語では単純形で併用する意味を表す形も独特の発展を遂げるなど、他の点でもヨーロッパ言語全般とは異なった独特の文法を発達させている。従って、完了形も独特の発達の仕方をしたということも考えられないことはない。例えば、I have got two sisters や I've got to go 等は、形そのものは現在完了形と酷似しており、単純現在形の I have two sisters や I have to go とほぼ同じ意味で用いられ、You've got mail 等の様に、完了形と峻別しがたい場合も多い。勿論これは過去分詞が got に限られると言う点では一種の idiom とも考えられるが、Hot News 用法が過去の出来事に焦点があると言うなら、これは現在完了形が歴然と現在の状態に焦点がある用法と言ってもいいはずである。

少なくとも英語の現在完了形の用法において共通するのは、全体としては現在の状態を述べている点であり、現在完了形が用いられるのは、全て過去分詞の出来事が、現在の状態の特徴づけに貢献すると話者が判断した場合だと考えることができる。

### 2.3. Current Relevance

現在完了形の説明には、従来 Current Relevance という概念がしばしば使われてきたが、これも過去分詞の事態が現在の状態の特徴づけに貢献するからである。この概念そのものは、例えば(9a)と(9b)の違いを説明するために、広く受け入れられてきた。

(9a) His nose has been broken seven times.

(9b) His nose was broken seven times. Langacker (1991 : 212)

例えば(9a)は、主語の鼻の持ち主はまだ現役のボクサーで、現在も（そして多分これから）鼻を折られる可能性があり、(9b)は既に現役を退いている様なニュアンスで用いられることが多いのは事実である。だがそれは Current Relevance の一つの具現例ではあっても、概念定義の明確化に直接的にはつながらない。(9b)の場合でも、この人物が既に引退していないと使えないとは必ずしも言えないし、これから鼻を折られる可能性も絶対無いとも言えない。その様な可能性は(9b)と直接的関係がないというだけである。であれば(9a)と(9b)の違いはあくまで相対的なものであり、上記の様なケースが多いというだけである。McCoard(1978)や Klein(1992)、Harder(1996)等々も指摘しているように、この概念には検証可能な明確な定義がない。更に、繰り返しになるが、関連性のないことなど、言おうとしても難しい位で、我々は通常談話の流れに沿った関連のあることしか発言しないものである。(9b)も適切な状況において発話されるのであれば、何らかの Current Relevance がある筈である。従って Current Relevance は、現在完了形だけの特性とは言えない。

しかし、この概念がこれまで広く受容されてきたのも、何か直感に訴えるものがあるからであり、現在完了形に何らかの Current Relevance が感じられるのも勿論誤りではない。ここでは Current Relevance の正体を、「過去の出来事の影響が何らかの観点から捉えられる状態が、発話時現在談話状況において存在すること」という形で定義し、構文の中に意味的に組み込まれているものとする。そうすれば、この概念を(8b)にはなく(8a)に存在する要素として捉えることができる。

現在完了形と談話との関係については、McCawley(1971)に触発されたと思われる Inoue(1979)が興味深い考察を行っている。前述したように、(10)は Einstein の死後でも必ずしも非文ではないが、どんな場合でもいいというこ

とでもない。

(10) Einstein has visited Princeton.

Inoue は、(10)等の現在完了形の容認性を左右するのは、話題のあり方だと考えた。例えば(10)が使われる談話での話題が、(11a)や(11b)であれば全く問題ない。ところが(11c)や(11d)等であれば、当然(10)は Einstein が存命中でなければ使えない。

(11a) Talking about Princeton University having memorable occasions.

(11b) Talking about the Nobel Prize winners visiting Princeton.

(11c) \*Talking about Einstein engaging in various activities.

(11d) \*Talking about Einstein visiting American universities.

同様に(12)は、話題が(13a)であれば適切な文として使用可能だが、それ以外の(13b-e)では使えない。

(12) Daniel Jones has done linguistic work in colonial India.

(13a) Talking about a linguist working in colonial territories.

(13b) \*Talking about Daniel Jones engaging in various activities.

(13c) \*Talking about Daniel Jones doing linguistics in colonial India.

(13d) \*Talking about colonial India and its activities.

(13e) \*Talking about people doing linguistic work in colonial India.

Inoue は(13a)が話題であれば(12)が容認される理由は、昔植民地であった地域自体は今日も現存し、そこでの研究活動も反復可能だからだと述べる。

Inoue はこの様な現象に着目し、現在完了形の使用を可能にする話題とは「繰り返し可能な活動」だと分析する。話題が(13b)や(13c)の場合に(12)が非文となるのは、Daniel Jones は既に他界しており、研究やその他の活動を「繰り返すこと」はできないから。インドはもはや植民地ではないので、colonial India での研究や活動も、もはや「反復可能」ではない。それが、話題が



(13d, e)の場合、(12)が非文になる理由だと彼女は結論づけている。

しかし、これらの事例を見ていると、鍵となっているのは、彼女が重きを置いている単なる「反復可能性」というよりは、話題が「現在でも続行中または生起可能かどうか」だということに気がつく。例えば、He has lived in this town all his life は「彼の町についての豊富な知識」が話題でも可能であり、その様な知識はそもそも「反復可能」という概念と相いれない。現在の反復・継続的行動や出来事というのは、習慣的出来事であり、一種の現在の状態だからである。それに対し、故人のことや旧植民地等の過去の人や事物が話題であれば、それが反復可能であれ何であれ、英語では、それらについての記述は過去形で表現しなければならない。現在完了形は現在のことについての描写だから、話題が現在の状態であれば当然親和性が高い。即ち、現在完了形の容認性を左右するのは、過去分詞の事態が、発話者の描写対象である現在の状況、特徴づけや説明に貢献しうるかどうか、即ち現在の状態の表現に貢献するかどうかである。Inoue の考察自体は大変示唆的だが、話題の反復可能性というところで留まってしまい、「現在の」というところが抜けていたのは、彼女の議論の前半で述べられている「現在完了形は過去の出来事を表す」という非常に根強い考え方が、妨げとなっていたのではないと思われる。

#### 2.4. 2 節のまとめ：現在完了形の主役としての have

本稿で言いたいのは、他でもなく、冒頭でも述べたように、「I have had lunch」という表現の中心は、昼食を取った動作そのものではなく、それに特徴づけられた結果状態、例えば『満腹である』等の状態を表している」ということである。We've already met も「会ったという出来事」というよりは、会った結果の、例えば「お互いについて何か知っている」等という状態の方を表現していると Hirtle(1969)も述べている。Clausal head の一番左側にある要素

は意味的に最も大きな枠を決めるし、have は助動詞であっても意味は存在し、時制も備えている。従って完了形の have についても、構文の意味の大枠を決める、どちらかといえば主の働きをする要素と考えても不自然ではない。

このセクションでは、現在完了形が表すのは過去の出来事とされた為、意味内容の中心を担っているのは過去分詞の方と考えられ、Langacker 以外は殆ど議論の対象とすることのなかった have の意味に焦点を当てた。Langacker (1991 : 213-215) も、概略的にはあるが、完了形構文の助動詞の have は、出来事と発話の時空における話し手・聞き手 (speech time or speech-act participants) との Current Relevance を表すと捉えている。完了形の have は、(14) の様に「主語と目的語との関係」を表す本動詞としての have から subjectification の働きによって、「出来事と発話者の時空との関係」を表すように意味が shift した例として説明されており、説得力がある。

(14) We have a lot of skunks here.

Langacker (1991 : 224) はまた、[have + 過去分詞] からなる完了形構文の profile determinant を have だとも言っており、つまり現在完了形が全体で表す意味の中心が、have であり発話時の状態であることも明確に示唆している。ところが、別の箇所 (1991 : 220) では現在完了形は意味的には過去の出来事を表すとも述べており、見解に不明な部分もある。(過去の出来事を含むという意味でなら勿論問題はないが。) また Langacker (1991 : 211-225) は、大筋では完了形を正しく捉えているが、議論が概略のみで具体例による肉付けが殆どなされていない。ここでは、Langacker の骨子的な案を具体例によって敷衍し、Current Relevance とは have の意味そのものであり、「文の主語・目的語を主体及び対象物とする過去分詞の出来事に何らかの影響を受け特徴づけられたものとして、談話の流れにおける発話時現在の状況において発話者が捉えた状態を表すもの」と考えれば、完了形の have の意味をより明確に把握可能にでき

るのではないかと提案した。無論この提案が成立するためには、完了形の過去分詞や時制の意味機能を併せて考える必要があるだろう。そこで次章では、現在完了形の謎を解く2つ目の鍵として、過去分詞の意味機能の明確化に着手したい。

### 3.0. 現在完了形の過去分詞の意味機能

#### 3.1. 過去分詞の一般的意味特性

現在完了形の過去分詞の意味機能についても、Langacker は概略的には正しい方向性を示してくれている。過去分詞一般の特性は Langacker の認知文法の枠組みでは、atemporal relation で、かつ temporal anteriority to Reference Point を表すと捉えられ、これは完了形の過去分詞にも共通する性質とされている。atemporal relation というのは、temporal profile を持たない、つまり、時間の流れにおける位置を占めるものとして捉えられる意味要素を持たないことである。過去分詞の場合、動詞から派生する段階で、事態の時間的生起位置が意味から捨象されている。認知文法では、品詞は先ず「non-relational である thing」と「それ以外の relational」に分けられ、更に「relational」は「temporal relation を表す動詞」と「それ以外の atemporal relation を表す形容詞・副詞・前置詞等々」に分けられる。過去分詞はこの「atemporal relation」を表すものの一つなのである。一方、temporal anteriority to Reference Point というのは、参照点において事態が既に完結しているイメージであるが、現在完了形の場合、参照点は発話の時空を指す。本稿では、概略このスケッチを踏襲するが、これに加え、過去分詞の「何かを特徴づける修飾作用」にも着目したい。現在分詞が動作の途中という形で修飾対象を特徴づけるように、過去分詞は動作が完結し終わっているイメージで修飾対象を特徴づける。現在完了形のいくつかの不思議な性質は、過去分詞の特性に焦点を当て

ることによって解明できる部分も多い様に思われる。

そもそも過去分詞というのは、古英語の時代からずっと、基本的には、語幹動詞の既に起きた出来事によって変化がもたらされた結果の様態として、修飾対象である物事を形容し特徴づける修飾機能を持ち続けてきた<sup>5</sup>。従って (15a) ~ (15d) の様な、様々な過去分詞には、事態の生起及び完結により影響を受けている様態を表現するという共通点がある。

(15a) I like *fried* fish. (Adjectival past participle)

(15b) The fish is all *fried*. (Adjectival past participle)

(15c) I have *fried* fish on my plate.

(There's *fried* fish on my plate. PP: adjectival participle)

(15d) I have *fried* fish. (PP: perfect participle)

つまり、過去分詞で表わされた事態自体は、過去の或る時点で起きてはいても、過去分詞として表現(profile)された段階で、生起時点は背景化され(baseに移り)、機能の中心は何かを特徴づけることに移る。これは、arch をイメージするには、前提として(baseに)円が存在するが、arch が profile するのはあくまでその一部だということと似ている。だからこそ(15a)から(15c)までの *fried* を *yesterday* で修飾できないのと同様、(15d)の英語の現在完了の過去分詞も、事態の過去の生起位置を明確に表す時間副詞では修飾できないと考えた方が自然だというのが、本稿の主張である。

ただし、(15a-d)の過去分詞に修飾機能という共通性があると言っても、これらが同じだと言っているのではない。(15a)から(15c)迄の過去分詞と(15d)

<sup>5</sup> Hirtle(1969)は、Nを帯びる様を表す *verandahed, blue-eyed, talented, broken-hearted* 等の [N+ed] という形に見られるように、過去分詞を形成する-edは名詞を形容詞化する上でも大変生産的であることを指摘していて大変興味深い。また、過去分詞の特徴づけの機能は、受け身の場合についても、Bolinger (1975)、高見 (1995)、谷口 (2003) 等で指摘されており、過去分詞全般のコア的な意味機能であることが示唆されている。

の過去分詞との間には一つ大きな隔りがある。前者では fry という動作の主体が誰であるかについては特に意識されないのに対し、後者の(15d)の場合では文の主語が過去分詞の動作の主体と認識される。これが、上述したように、現在完了形が過去の出来事を表していると感じられる、もう一つの理由となっていると思われる。過去分詞化されて生起位置が捨象され、背景化されていても、主体等の伴った具体的な事態のイメージは強く残るというわけである。その上、完了形の過去分詞の修飾対象は have の表す状態で、(15a)の fish のように明確にイメージできるものではなく、使用の場で理解される性質の談話の状況なので、空気のような存在であり存在感が希薄である。

しかし、過去分詞の本分が修飾機能にあると考えれば、説明可能な現象は多々ある。次の(16a - d)は、現在完了形と時間副詞とが両立する容認可能な例として、先行文献でもしばしば目にするものである。しかし、これらの容認性には揺れがある。これらを一目見るなり、非文として全く受け付けない母国語話者も存在する。

(16a) I've given up that idea *long ago*.

(16b) He has worked *on Sunday*.

(16c) He has gone back to visit his mother *two months ago, last weekend, and just yesterday*.

(16d) Your brother has eaten all the cakes *while you were out*.

このことは、以下の様に説明できるだろう。過去分詞の本分が修飾機能にあれば、情報価値は高くても、構文の中では過去分詞はどちらかと言えば脇役のはずである。従って、時間副詞と共に起できるのは、時間副詞に修飾された過去分詞を中心とした情報が、主役の邪魔をせず脇役としての分を超えない範囲の場合ということになるのである。その証拠に(16a)は、「ずっと前に起きたこと」の方が主張の中心として解釈された場合には、当然のことながら容認されない。

そうではなく、「ずっと昔に諦めていて、今ではもう試みる等ということすらすっかり考えもしないくらいの状態であること」が描写の中心対象である場合に、容認可能となるのである。(16b)は、この Sunday が「先週の日曜日」等といった、特定の事態の生起位置を指さない場合に容認可能となる。例えば安息日に働いたことがある、つまり例えば非難されるべきであるだとか、それほど忙しいなどという、現在の主語の属性を伝える意味でなら、使われるのである。(16c)は、現在完了形が yesterday 等と共に起しないという原則への反例として、McCoard(1978)が挙げている例であるが、これも、三つの過去の出来事がそれぞれの時間的位置に起きたことに焦点があるのであれば容認されない。これが可能なのは、彼がこのような頻度で母親に会いに行ったことが、発話の状況で彼の優しさを示す例証となるなど、何らかの意味を持つ時だろう。(16d)も英語を母国語とする人が、非文でない例文として挙げていたものである。食べたという行為が焦点であればこれも容認されないが、例えばケーキが全然残っていないテーブルの上の皿を指しての発話であれば、特に不自然ではない。

この様に、時間副詞が現在完了形と共に起しうるのは、出来事がいつ起きたかということではなく、発話者が言わんとする現在の状況のある側面の説明に、過去分詞以下の内容が全体として貢献する時なのである。即ち、過去分詞が現在の状況の何らかの特徴付けをして修飾機能を果たしている時であり、現在完了形のメカニズムに叶った使われ方をしているときなのである。

### 3.2. 過去分詞事態の token/type 解釈と副詞

Michaelis(1998)は、現在完了形が時間副詞や様態副詞と共に起不可能なのは、結果用法の場合であり、経験用法の場合は、(16b)や(17b)の様にそれらと共に起可能なことから、結果を表す現在完了と経験を表す現在完了をそれぞれ別の構文だと主張する。

(17a) Our committee chair has (??angrily) tendered his resignation.

(17b)の様に、経験用法の解釈をする場合には全く問題がないのは、別構文だからだと言うのである。

(17b) Our committee chair has angrily tendered his resignation every time we asked him to take a controversial stand on something.

しかし、(17a)に angrily が付くと不自然なのは、とりもなおさず、様態副詞によって過去分詞の出来事が token として解釈され、文の表す内容としてそれだけが前面に押し出され際立ってしまい、かつその結果状態があまりに漠然としているからである。そのような場合は、(17c)の様な単純過去形の領分である。

(17c) Our committee chair angrily tendered his resignation.

(17b)に問題がないのは、様態副詞によって修飾された過去分詞の行動が、或る条件下で決まって起きるものとして描かれ、type の解釈を生み、そういう反応をする人として、現在も当てはまる主語の属性の描写として理解され、現在の状態の表現に貢献するからであろう。つまり、頻度等の要素が経験用法としての解釈を促すのである。(17a)に頻度等の要素を加え(17d, e)の様にすれば、過去分詞の事態が type 解釈となり、現在も当てはまる主語の、人となり等、現在の状態を描くエピソードとして理解され得る。

(17d) Our committee chair has angrily tendered his resignation many times.

(17e) Our committee chair has once angrily tendered his resignation.

一方 Michaelis(1998)は、結果用法が yesterday 等の時間副詞や様態の副詞と共に起できない理由について、その構文の特性だからという以上のことは述べていない。前章でも述べたように、結果用法というのは、基本的に過去分詞の事態の直接的な結果が現在存在する場合である。直接的結果というのが認識さ

れるのは、(17a)の例からも分かるように、過去分詞の事態が、基本的にもともとは或る現実の時間で起きた、(一回で個別の)具体的な或る出来事の場合である。即ち、token/type で分類すれば、token として認識されている。従って、もともと出来事の特定の時間的生起位置が意識されやすい。それを時間副詞や様態副詞で修飾し token としての出来事性を色濃く前面に押し出してしまうと、現在の状態を修飾する過去分詞の脇役機能を逸脱し、過去分詞の出来事的生起の方が目立って、真の主役の have と衝突してしまう。そうなると、単純過去形という、より単純な形で表せる内容となり、現在完了形を使う意味がなくなるのである。一方経験用法の場合の副詞は、過去分詞の事態の時間軸上の生起位置ではなく、出来事の有無、或いは頻度を表し、have の表す現在の状態の有り様の説明に貢献しうる。同じエピソードであったとしても、単に過去のある時生じた出来事として述べられている token の場合と、話者の知る限りの時間の中で一度を含む或る頻度で起きたこととして述べられる type の場合とでは、主語の現在を含む本質的な属性や人となり、または現在の何らかの状況を説明として理解される度合いが歴然と異なる。token としての出来事は、もうそれだけで言語使用者にとって情報価値が十分な main dish となりやすく、type の場合、副詞に修飾された過去分詞が、文全体の副菜として、修飾機能に専念可能な様に思われる。

Michaelis の主張では、別構文ということが何を意味するのか定義が明確でなく、別構文とする判断する根拠も時間副詞と様態副詞との共起可能性でしかなく、議論が circular である。結果と経験の違いも不明確で、或る例を結果または経験と判断する明確な基準もない。Michaelis 自身もどちらとも決められない場合もあることを認めているが、なぜ両者の中間的な例や両方の要素を併せ持った場合があるかについても説明していない。また、例えば Hot News 用法も結果用法とは別構文かどうか不明である。別構文であるとすれば、



Hot News 用法も yesterday 等の副詞と共に起不可能であり、その理由は説明できない。

前節でも述べたように、本稿では、現在完了形のいくつかの用法というのは、基本的に過去分詞の事態のあり方によって、現在の状況にもたらす結果や影響といった特徴付けのあり方に違いがもたらされる際の、大まかなパターンであると考えられる。ここでは、type/token の区別といった観点から完了形の過去分詞の事態のあり方を考察した。

### 3.3. 過去分詞の完結性からくる特徴付け

さて、過去分詞があくまで脇役として修飾機能に徹している様子を、間接的に観察できる手段は他にもある。その一つが、現在完了形が継続用法として解釈されるには、期間を表す副詞が必要となるという事実である。例えば(18a)には「以前住んだことがあって今は住んでいない」場合と「今も住んでいる」場合の両方あり得るのに対し、(18b)には前者の意味しかない。

(18a) Joe has lived in Paris *for two years*.

(18b) Joe has lived in Paris.

その理由も、過去分詞の「事態の完結による特徴付け機能」にあると言ってよい。この場合の live の様な imperfective な事態イメージには、Langacker (1987)の Cognitive Grammar でも説明されているように、基本的に変化が意識されずそれ自体に本質的な始まりや終わりといった事態の輪郭がない。従って、(18a)と(18b)に共通してあり得る、live の継続期間が既に終わった或る時期、または終わった2年間という解釈は、「完結することによって特徴付ける機能」を持つ過去分詞の方が作り出している。これからも続く現在継続中の事態の場合、まだその結果や影響に言及することはできないからである。過去分詞の事態が修飾対象に、何らかの変化や影響をもたらしているということは、

その事態自体に、何らかの形でキリが付けられて認識されているということでもある。動詞のアスペクトが perfective の場合、過去分詞の事態が完結しているのは当然の様に見える。そこで、過去分詞が live の様な imperfective な事態の場合、(18c)の様な単純過去形と比較すると、完結性がより顕著となる。

(18c) He lived in Paris.

(18c)は、単にある過去の時点において当該の継続状態があったことを表現するだけで、現在については記述の対象外で commit しない。従って今も継続的に住んでいる場合でも(18c)とは矛盾はしない。それに対して(18b)の過去分詞は、より積極的にそれまでに完結していて今は継続状態にないことを意味するので、(18b)をHe still lives there の意味に解釈することはできない。ずっと継続しているのなら最初から、より単純な形である He lives there が使われるからである。期間を表す副詞が付随すると(18a)の様に「今も住んでいる」の解釈をもたらすのは、終わってはいても「2年前から今迄」として解釈されるからである。今の今迄ずっと続いていたことは、特に断らない限り、とりあえず今も続いていることが多いので、今も継続中と感ずるのは自然である。だからそのような含意は生じやすいと思われる。発話時から遡って2年前からという意味に解釈されるのは、現在完了形のアンカーが発話時現在にあり、構文全体として現在の状態を表しているからで、それは、過去5年間というのが、わざわざ今迄の5年間と言わなくても、5年前から今までという意味で通常解釈されるのと同様である。ここで重要なことは、(18a)の過去分詞自体の継続期間は「今迄というキリ」がついていて、厳密に言えば、終わっているということである。例えば Joe has been to Japan twice も、Joe の2回目の来日後、つまり日本を発ってからでないと思えない。Klein(1992: 539)にも同様の観察が述べられている。例えば(18a)では継続期間の長短で、住んだ場所についてのそれなりの知識の豊富さを物語ることができる。基本的には終わりのない状

態イメージの場合、期間で限定されてはじめて、現在の状態をその結果として特徴づけるだけの情報価値が備わると言えるだろう。

また、(19a)がおかしいのも、一度死ねば、死んだ状態が終わることはないからである。(19a)は死んだ状態が終わったことを意味するから、蘇生が可能な場合でかつ蘇った後であれば、当然容認される。

(19a) \*Chris has been dead.

(19b) He has been a student.

(19c) \*He has been black-haired.

(19d) ??The door has been wooden.

これに対し(19b)が自然なのは、勿論、学生である期間は通常終わるものだからである。(19c, d)が奇異な感じがするのも、もともとの髪の色やドアの材質は終わる状態ではないのに、完了形が、過去分詞が表す継続期間の終わっている読みを強いるからである。勿論ドア自体を交換した後等では(19d)が自然な場合もあるだろう。

一方、(20a)は(19a)に期間がついたただけだが、どこにもおかしいところはない。

(20a) Chris has been dead for two years.

それは、2年間という期間自体は、終わりうるからであり、死後2年経過したことを表すからである。誰かの死後何年かという情報は、そのショックがどの程度薄いであるか等、現在の話者の心境を描く場合に十分寄与すると考えられる。

更にこの期間副詞を前置した(20b)が容認不可能なのは、前置された副詞は基本的に文副詞となって、文全体にかかり、メインの方である have の表す発話時の状態の方にかかるか、または「過去の2年間だけ死んでいた」と(19a)の奇妙さを増長させてしまう意味となるからである。

(20b) \**For (these) two years, he has been dead.*

どちらも普通はあり得ないが、後者の場合、死人が甦る世界では、勿論容認可能となる。

最後に *recently* との共起関係について Comrie(1985: 33) が言及している点について触れておく必要があるだろう。*recently* は過去形とは共起するが((21a))、単純現在形とは共起しない副詞((21b))である。

(21a) *Chris arrived here recently.*

(21b) \**Chris is here recently.*

Comrie は、*recently* が(21c)の様に現在完了形と共起する現象を、現在完了形が現在形でない理由の一つとして挙げているのである。

(21c) *Chris has recently arrived.*

しかしこれは、この *recently* が過去分詞の方にかかっている、かつ全体の陳述の焦点も *arrive* という出来事ではなく、Chris が新入りであるとか、まだ新しい環境にすっかり慣れてはいない状態だとか、現在周りの人間にとって新鮮である等、現在の状況を表現する方に情報価値があるということが考えられるからである。*arrive* という出来事に焦点があれば、(21a)の様に表現される。(21d)の場合のように、*recently* が前置され、文副詞として文全体にかかるとう容認不可能となり、(21e)の様に *now* であれば容認可能であるところからも、やはり現在完了形が、文全体としては現在の状態を表現していることが見て取れるだろう。

(21d) \**Recently, Chris has arrived.*

(21e) *Now, they all have arrived.*

勿論、現在完了形は、現在形の一つであっても、単純現在形とも異なる。単純現在形は名の表す通り、基本的に「imperfective な事態そのもの」が発話時現在あてはまっていることを表すのに対し、現在完了形では、「過去分詞の事

態生起に特徴づけられた状態」が発話時現在あてはまっている。従って、例えば I have collected 10 dollars at this moment では、at this moment が up to now の意味で解釈されない限りは奇異なのは、at this moment が過去分詞にかかる解釈を受けやすいからである。これが文頭に来れば、容認度はかなり改善する。また、現在完了形が up to now や so far 等と相性が良いのは、過去分詞がこれ迄に起きたことを表し、現在完了は、その影響として発話時現在の状態を査定する為の構文なので、過去から時間の広がりにおける積み重ねの決算のような視点を促すからであろう。

このセクションでは、現在完了形の過去分詞の方に焦点をあて、現在完了形の have が have + 過去分詞という構文全体の意味的性質を決める要素であり、過去分詞はあくまで物事の完結によってそれを特徴付ける従の要素であること、そう考えれば様々な副詞との共起関係を説明できること、を述べてきた。次に、現在完了形が構文全体では現在を表し、過去形が過去の出来事を表すということがどういうことか、つまり時制とは何かについて詰めてみたい。

## 4.0. 現在完了形と時制

### 4.1. 現在完了形の時制の問題点

現在完了形が、正体の掴み難い謎めいたものに見えるもう一つの原因として、メカニズムを捉えるのに必要不可欠な、英語の時制そのものの解明が遅々として進んでいなかったということが挙げられる。Comrie(1985)は、Vikner(1985)その他でも批判されながらも存在し続けた、Reichenbach(1947)の現在完了形や過去完了形それぞれを一つの時制とする考え方は、否定している。完了形自体には、法助動詞に続く時もあれば動名詞や不定詞句の時等もあり、また時制が伴わない場合もあるので、一つの構文と見なすのが自然であろう。しかし、上述したように、Comrie は現在時制の一種ではないという見解も呈している。と言っ

ても過去時制の一種だと言い切っているわけでもなく、過去と現在の組み合わせというところで落ち着いており、どのように組み合わせられているかについては明言を避けている(Comrie : 1985 : 35)。本稿でも、現在完了形が過去と現在の組み合わせという事自体には異論はないが、どの様に組み合わせられているかは重要な問題であろう。現在完了形が時制文の一つで、英語の時制には現在か過去のいずれかしかないのであれば、どちらでもないとは言えない筈である。即ち Comrie にとっても、完了形は不可思議な謎の存在であった。

また、時制や現在分詞・過去分詞等の意味機能を体系的に取り扱い、それらの解明にも貢献する理論的枠組みを構築した Langacker も、完了形については、「意味的に時制とは異なるやり方で出来事的位置を指定する、最も記述説明が難しい構文」と記す (Langacker : 1991 : 211-225)。彼の、subjectification という概念を利用した、完了形の have の意味についての議論は汎用性も高い。特に have が profile determinant であり、完了形は、構文全体では have の表す状態を、過去分詞の方は atemporal relation (生起している時間上の位置を意味の中に含まない関係)を、それぞれ表す事を体系的に導き出す等、Langacker の説明は、have + 過去分詞の構文分析や現象記述としてより正確さを増した。これらの点は本稿の見解と軌を一にする。だが、完了形構文が、1) RP(時間上の参照点)を想起させ、2) それが have の時制の置かれる位置にあること、3) 完了形の過去分詞が表す出来事の生起がそれより前にあること、4) その出来事が RP の時点で Current Relevance も持つ、等の事実は、それまでも言われてきたことである。その上、Langacker の認知文法では、現在完了形と時制の関係についてはまだ殆ど明らかにされていない。時制は RP の存在する位置にあるとは書かれていても「なぜ RP の位置が時制の示す位置なのか」については触れられていない。また彼は、完了形は「既に完結している過去分詞の出来事と現在関連性を持つ RP 迄の継続的状态」を表す

と締めくくってはいるが、「なぜ RP 迄なのか」という点についても明らかにしていない。本稿では、これまで述べてきたように、RP 迄に完結している出来事というのは、過去分詞の表す出来事だと考えており、have の表す出来事は第 2 章の冒頭でも言及したように、基本的には終わりの意識されない imperfective situation である。そう考えれば、基本的に boundless である imperfective アスペクトの定義とも矛盾しない。I've met him で、「meet した結果彼を知っている」等の「経験の保有状態」は「終わりの意識されない状態」なのである。また、これも上述したことだが、Langacker(1991:220)では、現在完了形は意味的には現在より以前にある即ち過去の事態を描写するという記述も見受けられる。勿論これは「過去の事態も描写している」という意味でなら矛盾はないのだが、前章でも述べた様に、過去分詞で表された出来事が意味的に強く感じられることを反映した表現であることは明らかだ。それと「完了形の profile determinant が have であること」とがどういう整合性を持つのかについても Langacker(1991)では示されていない。それはまた、have の方に備わっている時制の機能と、この構文全体における過去分詞の出来事が、結局どう相互に関わっているのかについての説明が十分でないということでもある。即ち、完了形と時制との関わりにおいては、Langacker の説明も、基本的には Reichenbach(1947)以来の一般的な見方や、Comrie(1985)等の説明と大きな違いはなく、完了形構文が、現在完了形という、時制を帯びた形で具現した場合の、時制と完了形との関係についても明確な言及がない。本稿では、時制と完了形との関係を明らかにした上で、現在完了形は現在時制の一表現だと主張していくわけであるが、その為に、まず現在時制とは何かということを押さえておきたい。

#### 4.2. 英語の時制の意味

人間が言語を使い始めたのは、それまでに起きた出来事の記憶や現在の世界を把握して、語り継いだりそこから未来を予測したりして、技術や知識・情報を収集し交換する為であったであろうから、おそらく世界中の言語にも、何らかの意味での時制の様なものは存在するであろう。だが、Bybee et al. (1994 : 97)等からも分かるように、時制という概念カテゴリーとして、世界中の言語に普遍的に当てはまる類のものはまだ存在しない。英語の時制概念と重なる意味も有する形態素は日本語にもあるが、その使われ方は英語の時制とは本質的にかなり異なると言って良い(樋口 : 2000, 2001)。従ってここで取り扱うのは、英語という個別言語の時制形態素の意味機能である。それが時制の振る舞いを正しく捉える一つの方法だからである。

従来の時制の捉え方の最も大きな問題点は、Harder(1996)も指摘しているように、時制が動詞の表す事態の生起する時点、即ち出来事が占める時間軸上の位置を表すとされてきたところにある。これを「時制の出来事時説」と呼ぶことにする。出来事時説では、例えば *It flashed* の過去時制は、閃光の起きた瞬間時を指すと捉えられてきた。時間副詞なども時制表現の一部と捉えられたこともあった。しかし、時制という概念を学習する際に刷り込まれているとも思える、このもっともらしい時制観には、実は大きな矛盾がある。例えば(22a)で表されている内容は、発話時現在の瞬間だけではなく恒常的に成り立ち、しかも(22b)の様な過去形の場合でも同じ事が言える場合がある。

(22a) Albatrosses are large birds.

(22b) Albatrosses were large birds.

その際、出来事時説からすれば、(22a,b)の時制は両者共、過去から現在・未来へと広がる普遍的な時間を表すことになり、時制の意味は同じになってしまうのである。そうなると、(23a)と(23b)に感じられる違いも、出来事時説で



は説明不能である。

(23a) He is a student.

(23b) He was a student.

時間軸上の点が関わるものとして時制を捉えようとする事自体は、我々の直観に沿っている上に、科学的方法論としても、時制の本質を捉える為にも、はずれてはいないだろう。但し、「現在時制は出来事が現在生じていることを表す」と言うならば、英語の現在時制表現としては、Hornstein(1990 : 8)の言う様に、(24a)の様な現在進行形が最もふさわしいということになる。

(24a) He is kissing Mary.

一方、(23a)のように事態が imperfective であれば現在の状態を表すには単純現在形が用いられる事実を鑑みれば、英語の時制のあり様、特に単純現在形を捉えるには、aspect への議論に立ち入らざるを得ないことも示している。ところが、Hornstein は、時制に焦点を当てる為に aspect には立ち入らないと宣言し、aspect が絡む議論を最初から排除しているので、現在時制の最も典型的な形である単純現在形の意味はおろか、この形の分布範囲を統率する原理についてさえ、何も答えてはくれない。

典型的な単純現在形の文が表す事態は多くの場合、過去のある時点から現在そして未来に亘って継続する、いわゆる状態である。時制が動詞の表す出来事の生起位置を表すと考える限り、現在時制は、そのような状態の続く時間(22 a) (23a) や恒久的時間 (e.g. Water consists of hydrogen and oxygen)、或いは今の瞬時の時間(24b) や、はたまた未来(24c) や過去(24d) 等々、様々なありとあらゆる時点の時間帯を表すことになる。しかも He runs は現在時点の出来事を表せない。つまり、出来事時説では、お手上げ状態の観を呈する。

(24b) It's 8 o'clock sharp.

(24c) The train leaves at 7 tomorrow.

(24d) This weird guy comes to me yesterday and asks me for a loan.

そうなると、Joos(1964)や DePue(1983)の言うように、時制は時間を超越した概念(timeless)であるとか、または Casparis(1975)や Wolfson(1982)の言うように、時間と無関係だという結論になってしまう。しかしながら(23a)と(23b)の違いが、現在と過去という時間に関与しているのは明らかで、この直観は何らかの形で説明されなければならない。

出来事時説はまた、完了形研究にもかなりの弊害をもたらしている。Reichenbach(1947)は現在完了も一つの時制としていたが、その後の研究によってそれは否定され、今では英語の時制は、大方の意見でも現在と過去の2つだけということに落ち着いている<sup>6</sup>。現在完了形に付随する時制の形態素は、明らかに現在形である(zero形)。それにも関わらず、現在完了形を現在形の一種とすることに対して、これまで感覚的にかなり抵抗感があった根本原因は、やはり時制の出来事時説が一因していたと言えるだろう。完了形を文脈から切り離してみると、意味的に事態を色濃く表している(content verb)と感じられるのは、過去分詞の方だからである。

この出来事時説を排し、形態素の機能に則した画期的な時制観をもたらしたのが、北欧系の機能文法の流れを汲む Harder(1996)の指示機能説である。彼は、時制というのは基本的に<聴者に対して「文で描かれている事態が成立している時点を見極めなさい」という指示する機能>を持つと主張する。彼はまず、時制文を、[時制部分]と、[それ以外つまり文の表す内容(state-of-affairs)]とに分ける。例えば He is a student であれば、現在時制(zero形

<sup>6</sup> 英語には、時制機能を担う形態素は、明らかに2つしかない。未来を表す形は様々あるが、法助動詞の will 等にも現在形と過去形がある。完了形は法助動詞に後続でき、かつ動名詞や不定詞などの時制の無い形もあるので、have + 過去分詞の融合した形で機能している一つの構文として捉えられるようになったので、完了形にも現在形と過去形の2つがあると言えるはずである。

態) と [He-be-a student] に分かれる。図1の灰色の楕円の部分が、[He-be-a student] という文の内容が当てはまっている期間である。

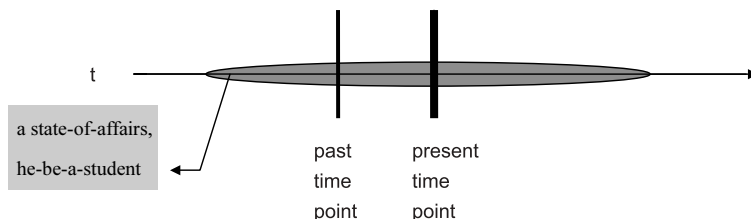


図1

現在時制はこの場合で言えば、[He-be-a student] という灰色の楕円状に時間的に広がっているイメージの文の内容が「発話時現在 (太線の時点) 当てはまっていること」を表し、He was a student の過去時制は [He-be-a student] という文の内容が発話時より前の時間帯のある時点 (図1で言えば細い方の縦線の時点) で成立しているので、「その時点を同定し意識しなさいと指示する」意味機能を持つのである。こう考えると、He is a student も He was a student も学生である期間自体は同じ場合がありうることも説明できる。時制は、談話の成り行きや、話し手と聞き手との間で理解されていると話し手が想定している知識を総動員し、その文の内容があてはまっているとして意識される時点を目指すのである。従って、(22a, b)の時制も、事態の生起位置などではなく、文の内容が成立しているものとして相手が認識し得ると話者が考える時点ということになる。実際、(23b)等も、過去のいつの時点の話なのか諒解できる要素が、発話の当事者の意識や文中または文脈になれば、文として不完全である。指示機能説はそのような感覚も説明することができる。

時制の形態素は、(24a)の場合では、kiss という始まりや終わりなどの輪郭が明確(perfective)な動作の途中の状態が、(24b)では、be という輪郭が明確

に意識できない imperfective な事態が、それぞれ発話時現在で存在することを表している。(24c)では、予定内容が予定として現在成立していること、(24d)では、昨日の出来事の順序や構成のあり方が現在も当てはまっていること(Higuchi:1996)を、それぞれ表しているとすれば、現在時制もすっきりと一貫した捉え方ができる。

#### 4.3. 現在完了形における現在時制の機能

Harder 自身は、不思議なことに完了形の説明には上記の彼の時制論を適用していないが、3章までの流れを踏まえれば、彼の時制の指示機能説は、完了形の場合にも成立する。すなわち、He has had lunch の様な現在完了形の場合は、[He - have had - lunch] という意味内容、つまり「彼が昼食を取った行動に特徴づけられる何らかの状況」が、現在あてはまっていることを表すのである。こう考えれば、現在完了形に唯一存在する時制の形態素が have に付随し、現在時制であるのも当然である。

また、現在完了形の RP が発話時となる理由も当然明らかである。現在完了の場合、過去完了と異なり、RP の時点を決定する出来事が先行談話において言及される必要がなく、談話の出だしでも使用可能である。それは、発話者は常に現在にいるからで、現在完了形が、全体では現在成立している状態を表すからだと説明できる。更に言えば、過去完了の場合、文脈中で言及されるなどして発話の当事者間で、ある過去の時点が RP として認識されなくてはならないのは、過去完了形が過去形的一种だからで、過去時制が過去のどの時点で生じたか認識することを要求するからである。

2章で触れた、話題が現在の状況で、それを説明する為に過去分詞の情報がエピソードとして貢献する際に、現在完了形が容認可能となる現象も、3章で扱った、時間副詞等が伴って過去分詞の事態の生起位置が強く意識されると、

脇役の修飾機能を超えてしまい非文になる現象も、全て当然のこととして説明することができる。

Langacker の説明に欠けていた部分も、本稿案で補うことができる。完了形は過去分詞と関連を持つ RP 迄の継続的状态を表すとしながら、なぜ RP 迄なのかについての説明がなかった点と、have が彼自身の説明でも基本的には boundary は意識しない性質を有する imperfective な状態のはずだという点である。前述したように、RP 迄なのは過去分詞の事態の方である。それが RP 迄に終わるのは、過去分詞という形が、完結した形で have に状態に特徴付けをする役割をもった形だからに他ならない。have そして現在完了形全体が表す状態自体は、第二節の冒頭でも論じた様に、発話時以降も続きうるし、本質的に終わりは意識されないものなのである。

Reichenbach の時制観では、特に Vikner(1985)が指摘する様な未来時制に関わる部分と、Harder(1996)の述べる様な RP に関わる部分に批判が多かった。英語には未来を表せる表現はあっても、それらは常に未来を表すとは限らず、更に未来を固有に表す形態素も存在しない。また Reichenbach の示す RP というのは、確たる定義もなしに使われ、文献によって異なる意味で使われたり、時制現象だけに留まらない概念であることなどが指摘されてきた。しかし、Reichenbach 自身の示す R にも、長い間支持されてきただけあって何か直観に訴えるものはある。つまり、Reichenbach が R と呼んだものは、時制が、ある談話の流れに発話の時空において、文の内容が当てはまる点として、identify せよと指示する時点のことなのである。その R の時点における状態を特徴づけるのが過去分詞の役割なのだから、過去分詞の表す事態が R の時点において関連性を持つのは当然のことなのである。

## 4.4. 英語の現在完了形・過去完了形・その他の完了形・欧州諸語の現在完了形

さて、以上のところまでで、現在完了や過去完了は、完了構文に現在又は過去の時制形態素が付随したものと考えた方がよいことを見てきた。するとどうしても気になってくるのが、現在完了形は、過去分詞の生起位置を強く意識させるような時間副詞と共に起できないのに対し、過去完了形等現在完了以外の完了形の場合では、(25a-g)に示すように、可能だということであり、それは何故かということであろう。

(25a) The ship carried a great deal of alcohol. She had left New York *on November 7*.

(25c) Yesterday, we learned that Harry had joined the navy *in 1949*.

(25d) He seems to have completed the job *yesterday*.

(25e) I feel great, having completed the job *yesterday*.

(25f) You will have heard the news *last night*.

(25g) He {could/would/might/should/must} have phoned me *yesterday*.

本稿では、まず、英語の過去完了形は、現在完了とは RP の時点が異なるだけの「所謂完了形の用法」と、所謂過去から見た過去としての「大過去としての用法」とを併せ持っていると考えている。つまり、過去分詞の意味の中から事態の生起位置の要素が捨象されてしまっている場合 (temporal profile が無い場合) 事態の時間的生起位置が含まれている場合 (temporal profile が有る場合) の両方が共存していると考えたいのである。

次に、(25d-g)の様な、have に時制が付随しない場合については、全体として、単に過去分詞の出来事に影響を受けた「ある時点での状態」を表すので、後者の場合でも、時間副詞の示す位置と現在が衝突を起こさないから可能だと考える。

現在、つまり発話時というのは、常に発話の時点であるという意味では一定

であるが、何時何分という客観的な意味では刻々変化していて流動的である。だから例えば、例えば書き言葉では、現在時制の文は、何月何日何時現在と明記されない限り、客観的な意味ではいつのことがはわからない。英語の現在時制は現在の一瞬を指定するが、現在という瞬間は流動的で、話しているうちにも、過ぎ去っていくものだから、確定的に意識できない。文の内容を理解しようとする際に、そこへ過去分詞の事態生起時までが絡んでくると、文全体の位置づけに混乱が生じやすいのではないかと現段階では考えている。それに比べると、現在完了以外の完了形では、文脈において、明確に文全体がいつの時点のことが示されていないなければならない。(25h, i)の様な文は、最初の had の過去の形態素の指す時点が意識されない限りは非文であり、談話の出だしで使われることはない。

(25h) \*I had had breakfast and went out.

(25i) \*They had lived in Singapore for six years.

一方、(25a-g)では、文全体を位置づける時間点が明確に意識されているので、過去分詞の事態の位置と衝突を起こすことなく、複合的に理解される。だからこそ、過去完了形、法助動詞、準動詞形等の場合は、文の内容全体の位置が、それぞれ発話の当事者が認識できる、ある過去の時点、未現実の世界のある時点、形が依存している時制文の時制に指示された位置になる完了形的意味の時と、その位置までに完結した出来事に焦点が或る時の、両方があり得るというわけである。

これは、ドイツ語フランス語等、様々な近隣の欧州系言語における完了形の振る舞いに、類似の性質と言えるだろう<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> 特にドイツ語などからみれば、Klein (1992) も疑問を呈しているように、英語の現在完了形が *yesterday* と共起できない現象は大変不可思議ということになるだろう。英語の過去完了形も、特に欧州諸語の完了形全般との関連を抜きにしては語れないであろう。

(26a) Ich habe den Brief gestern un sehn abgeschickt. (German)

[\*I have sent off the letter yesterday at ten.]

(26b) Jeg har sendt ham et brev i går. (Dannish)

[\*I have sent him a letter yesterday]

(26c) Woensdagayond heb ik mijn tante bezoekt. (Dutch)

[\*Wednesday night I have visited my aunt.]

(26d) Tuomas on syntynyt voanna 1950. (Finnish)

[\*Tuomas has been born in 1950.]

興味深いのは、文法的にも英語により近いノルウェー語やスウェーデン語では、現在完了形と過去時間副詞との共起関係も、英語の場合により近いということである。

(27) \*Jeg har sovet godt i gaar. (Norwegian)

[\*I have slept so well the night before]

(28a) Den här osthyveln har jag köpt i Stockholm. (Swedish)

(28b) Den här osthyveln köpte jag i fjol i Stockholm.

[I bought this cheese slicer in Stockholm (last year).]<sup>8</sup>

更に面白いことには、ノルウェー語の現在完了形では、時間副詞と共起できる場合があることを、英語の a while ago に近い時間副詞の例を挙げ Comrie (1985: 32) が指摘している。しかしながら、それは、この for et øyeblikk sideu という表現が元々意味する「瞬きするくらいのちょっとした時間」を指す場合であって、だんだん時間が長くなってくるとそれも難しくなるようである。しかもノルウェー語の ago に当たる語は before の意味に近い。従って、ノル

<sup>8</sup> スウェーデン語では(28a)の完了形も(28b)の単純過去も [ ] 内に相当する英語の過去形と同じ意味だが、(28b)の様に i fjol (last year) などがあると、過去形でなければ容認されない。



ウェー語の現在完了形は、ドイツ語の様に、基本的に過去の時間副詞と共に起できるという訳ではないと考えた方が良さそうである。即ちノルウェー語の現在完了形というのは、過去分詞に temporal profile がない英語と、あるドイツ語の中間の、英語寄りのどこかに位置するものだと言えるのではないだろうか。

このような gradability が、英語の過去完了形にも存在するのではないかというのが本稿の試案である。(29a)を(29b)のように間接話法にしてみると分かる様に、勿論この意味では、at two 等の時間副詞とは共起しない。

(29a) I have had lunch.

(29b) He said that he had had lunch { $\varphi$  /\*at two}.

現在完了形の RP の時点が、過去における或る意識できる時点（彼の発言の時点）となっただけだからである。これを完了形タイプとしておく。

これに対して、(30a)を間接話法にすれば、当然ながら(30b)の文法性には全く問題はない。

(30a) I had lunch at two.

(30b) He said that he had had lunch at two.

これはある過去の時点とそれより前の時点とが両方意識できるという意味で、先程述べた、大過去タイプと呼べるだろう。このように(29b)と(30b)の lunch までとは、表面上の形は同じだが、異なる意味が読みとれる。

つまり at two 等の付加が可能な過去完了というのは、現在完了形が back-shift したものではなく、過去分詞に temporal profile を想定した方がよく、大過去を表しているというわけである。He said that he had had lunch は、at two 等の付加により過去分詞の事態の生起位置が意識されれば、大過去タイプに解釈が決まる。だが、この様な状況によって解釈の定まる二通りの解釈可能性もあり、特に違いを意識しなければ、図 2 に示すように、両方の意味が、曖昧に重なっていたり、中間的に受け取られたりすることもあり得るように思

われる。

完了形タイプ(29b)

中間タイプ

大過去タイプ (30b)

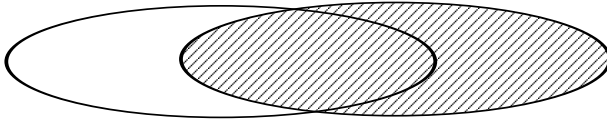


図2 過去完了形という形の意味

間接話法の従属節部分は、伝聞内容が発話時点でも成立していると発話者が責任を持てれば、現在形で表現できるので、(31a)の様に現在完了でも構わない。

(31a) I just heard that your husband *has* passed away.

(31b) I just heard that your husband *had* passed away.

(31c) I just heard that your husband *had* passed away on Christmas.

その際(31a)は(31b)に比べ、発話時における過去分詞の出来事の相手への影響に同情している感じを、より色濃く表すであろう。それに対し(31b)には、過去形の表す一呼吸分の距離感により、より客観性や冷静さがある。いずれにしろ、友人の夫の急逝の知らせを聞いた直後、等の場合であれば、死亡日時というのはあまり問題にならないであろう。日時に何らかの意味があり、情報価値のある場合は、大過去でかつ完了形的な意味がある場合もあるだろう。

ではなぜ英語の現在完了形はドイツ語の現在完了形のように過去の意味を表さない(過去分詞に temporal profile がない)のに、英語でも過去完了形であれば「過去の過去」の意味もあるのだろうか。それについてはまずひとつ、時制表現が歴史的に別の発達仕方をして、英語では、文語であれ口語であれ、過去の一時点を表現する過去形が存在するので、英語の現在完了形は、ドイツ語の現在完了形のように過去の意味を表す必要性がないことが考えられる。それ

に対し、英語でも過去完了の場合は、大過去を表す便利な表現は他になく、もともあった両方の意味が残ったのであろうと思われる。過去の過去といっても過去には違いないから、過去の過去を表すのに過去完了を使う必要は必ずしもない。しかしながら、過去完了にはそれなりに利便性があり、顕著な存在価値がある。

例えば、(32a)の2番目の文は、(32b)の様に差し替えても意味的には同じ場合もある。

(32a) Jane could not find her passport. She had gone through all her private papers, but it was not among them. Where could it be?

(32b) Jane could not find her passport. She went through all her private papers, but it was not among them. Where could it be?

それは、勿論大過去の意味の時であり、これから始まる談話が過去に遡る時等であれば、passport にまつわる過去の経緯をいろいろと思い出すなどの、過去形表現が続くこともあり得る。その場合、(32c)の様に、時間副詞が伴っても構わない。

(32c) Jane could not find her passport. She had gone through all her private papers { $\varphi$ /till late at night /yesterday}, but it was not among them. Where could it be?

しかしながら、(32b)自体には、「Jane が passport が見つからないと意識した後、第二文の行動が起きた」等と、時系列に出来事が並ぶ別の解釈もありうる。基本的に過去形の文が並んでいれば、時系列に解釈するのは不自然ではない。文脈によっては時間が遡る解釈を促すときもあるかもしれない。(32b)の場合にそれが可能なのも、第1文で、could not find になっているので、探そうと努力したのに見つからなかったというニュアンスがあり、「探そうとした」という過去の努力行動が意味的につながりうるからである。しかし、ある

と思っていたところやその辺をちょっと探したくらいでは見つからなかったという場合、大事なパスポートのことであり、当然その後血相を変えて大がかりな探索行動に及んだという成り行きになってもそれ程不自然でもない。つまり(32b)の様な過去形の場合、出来事の生起順序は図3の様にX、Y両方の場合があり曖昧である。遡っていることを明示するには、(32c)にある様な何らかの時間副詞が必要となるであろう。

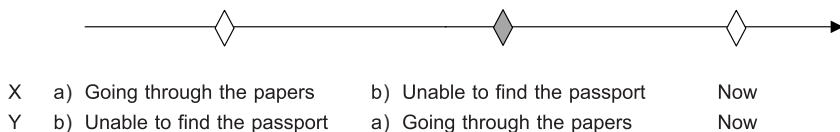


図3

それに引き替え、過去完了形の方にはそのような曖昧さはなく、当然 had によって could not find と同時、または連続した時間に文全体を位置づけ、テキストとしてのまとまり (coherence) を維持しつつも、過去分詞の出来事は、それより過去に遡る時間帯で起きたという意味しかない。しかも、遡ることを表現する為に時間副詞などを付加する必要もない。本稿では、この利便性が過去完了の大過去用法を支えている存在価値であり、存在理由のひとつであると考えている。英語には、より単純な形の過去形があるのだから、現在完了形で単なる過去を表す必要性はない。また、現在完了形の場合は、先程述べたように、過去分詞の事態の位置を表立って指定すると、現在と過去で衝突がおきるが、過去完了形の場合は、既にコンテキストや文脈で過去の位置が確立されているので衝突が起きないということもある。

ヨーロッパ言語における一般的な完了形のパターンからすれば、英語の現在完了形は特殊と言えるかもしれない。英語でも「完了形構文」自体には、英語

の過去完了形、またはドイツ語の現在完了のように、2つの意味用法があると考えても差し支えないだろう。ただ、英語の現在完了の場合では、たまたま、英語の単純現在形と単純過去形が、他言語とは異なる意味や振る舞いを持ち、それらと機能役割を分担するので、過去分詞から temporal profile が捨象されたものしか必要がないのであろう。いずれにせよ、英語の現在完了形の過去分詞には、英語の他の形容詞的用法等の過去分詞と同様、事態の生起位置を指定する機能は必要なく、その存在理由も特に見あたらない。過去完了形でも時間副詞が共起できるのは、現在完了形を backshift した完了形の意味の時ではなく、大過去用法の場合であり、大過去用法に存在価値があることが存在理由となっているのではないかというのが、本稿の見解である。

## 5.0. まとめ

以上、本稿では、構成素である have、過去分詞、そして時制の意味機能を捉えることにより、現在完了形が現在時制の一種であるということを論じた。現在完了形が表面上過去表現の一種の様に感じられるのは、have が、談話における発話の場の状況を schematic に表し、その意味の存在感が、文脈から切り離すと空気のように希薄だからである。また、過去分詞によってそれを特徴づける情報価値の高い出来事が選ばれる為、have の意味は相対的にますます見えにくくなる。しかし、have は、[have + 過去分詞] というまとめ全体の特性を決める要素であり、[have + 過去分詞] という構文全体は、「過去分詞によって特徴づけられた現在の話者の伝えたい状況」を表し、構文全体のアスペクトも imperfective である。現在完了形の現在時制は、そのような imperfective な状況が現在当てはまっていることを表す。これが現在完了の意味であり、それが Current Relevance と呼ばれてきた現象の正体でもある。本稿ではまた、このように捉えることによって、従来謎とされてきた、現在完

了形と様々な副詞の問題や現在完了形が使われる談話との関係をすっきり解決できることを示した。

## References

- Ackerman, Farrel and Adele E. Goldberg (1996) "Constraints on Adjectival Past Participles," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 17-30, CSLI Publications, Stanford.
- Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English," *LACUS* 1, 57-80.
- Bybee, Joan L. and Östen Dahl (1989) "The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World," *Studies in Language* 13-1, 51-103.
- Bybee, Joan L., Perkins Revere and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Bull, William E. (1960) *Time, Tense and the Verb: A Study in Theoretical and Applied Linguistics, with Particular Attention to Spanish*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Carey, Kathleen (1996) "From Resultativity to Current Relevance: Evidence from the History of English and modern Castilian Spanish," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 31-48. CSLI Publications, Stanford.
- Casparis, Christian P. (1975) *Tense Without Time: The Present Tense in Narration*, Francke Verlag, Bern.
- Chomsky, Noam (1971) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," *Semantics*, ed. by D. D. Steinberg and L. A.

- Jakobovits, 183-216, Cambridge University Press, Cambridge.
- Croft, William (1998) "The structure of Events and the Structure of Language," in *The New Psychology of Language-Cognitive and Functional Approach to Language Structure*, ed. by Michael Tomasello. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, New Jersey/London.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford University Press, Oxford.
- DePue, David (1983) *On the Semantics of the Present Tense in English*, Ph.D. Dissertation, The University of Pennsylvania.
- Drinka, Bridget (2003) "Areal Factors in the Development of the European Periphrastic Perfect" *Word* 54.1, 1-38.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Harder, Peter (1996) *Functional Semantics: A Theory of Meaning, Structure and Tense in English*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Higuchi, Mariko (1999) "The Role of Functional-Interactive Tools in Describing Tense in English," *English Linguistics* 16-1, 184-209.
- 樋口万里子 (2000) 「ルノタ、テイルの意味機能試論：認知文法の見地から」九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学), 第13号, 1-40.
- 樋口万里子 (2001) 「日本語の時制表現と事態認知視点」九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学), 第14号, 53-81.
- 樋口万里子 (2003a) 「英語の完了形と時間副詞句」九州工業大学情報工学部紀要人間科学編第16号, 13-38.
- 樋口万里子 (2003b) 「現在完了形と現在」(英語青年 6月号, 総合1852号) 180-181, 研究社, 東京.

- 樋口万里子 (2003c) 「現在完了のからくりと副詞」『「ことば」のからくり——河上誓作教授退官記念論文集』河上誓作教授退官記念論文集刊行会編, 513-527, 英宝社, 東京.
- Higuchi, Mariko (2004) “The Semantic Function of the English Present Perfect Participle,” *Bulletin of the Faculty of Computer Science and Systems Engineering, Kyushu Institute of Technology* 17, 9-38.
- Hirtle, W. H. (1969) “-Ed Adjectives like ‘verandahed’ and ‘blue-eyed,’” *Journal of Linguistics* 6, 19-36.
- Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*, The MIT Press Cambridge, Massachusetts.
- Inoue, Kyoko (1979) “An Analysis of the English Present Perfect,” *Linguistics* 17, 561-589.
- Jespersen, Otto (1992) (First published in 1924) *The Philosophy of Grammar*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Joos, Martin (1964) *The English Verb*, Universtiy of Wisconsin Press, Madison and Milwaukee.
- 川瀬義清 (1999) 「英語の完了形——認知的観点から」『英語英文学論集』第40巻第1第2合併号, 115-136.
- Klein, Wolfgang (1992) “The Present Perfect Puzzle,” *Language* 68, 525-552.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, volume 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, volume 2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1993) “Reference-Point Constructions,” *Cognitive*



*Linguistics* 4-1, 1-38.

Matsunami, Tamotsu (1958) "On the Old English Participles," *Studies in English Literature* 34, 161-180. (Tokyo: The English Literary Society of Japan.)

McCawley, James D. (1971) "Tense and Time Reference in English," *Studies in Linguistic Semantics*, ed. by Langendoen, D.T. & Fillmore, C., 97-113, Holt, Rinehart & Winston, New York.

McCawley, James D. (1981) "Notes on the English Present Perfect," *Australian Journal of Linguistics* 1, 81-90.

McCoard, Robert W. (1978) *The English Perfect: Tense-Choice and Pragmatic Inferences*, North Holland Publishing Company, Amsterdam.

Michaelis, Laura A. (1998) *Aspectual Grammar and Past-Time Reference*, Routledge, London and New York.

Nedyalkov and Jaxontov (1988) "The Typology of Resultative Constructions," *Typology of Resultative Constructions*, ed. by V.P. Nedyalkof, 3-62, John Benjamins, Amsterdam.

Reichenbach, Hans (1980) (First published by The Macmillan Company in 1947) *Elements of Symbolic Logic*, Dover Publications, Inc., New York.

Schwenter, Scott A. (1994) "Hot news' and the Grammaticalization of Perfects," *Linguistics* 32, 995-1028.

嶋崎啓(2004) ドイツ語現在完了形の歴史的変化 九州大学大学院博士論文  
谷口一美 2003 「-ed に関する覚え書」 『「ことば」のからくり——河上誓作教授退官記念論文集』, 499-511, 河上誓作教授退官記念論文集刊行会編, 英宝社, 東京.

- Vikner, Sten (1985) "Reichenbach Revisited: One, Two, or Three Temporal Relations?," *Acta Linguistica Hafneinsia* 19.2: 81-98.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics and Philosophy*, Cornell University, Ithaca.
- Waugh, Linda R. (1987) "Marking Time with the Passe Compose: Toward a Theory of the Perfect," *Linguistica Investigationes* XI.1, 1-47.
- Wolfson, Nessa (1979) "The Conversational Historical Present Alternation," *Language*. Vol.55, No.1, 168-182.
- Wolfson, Nessa (1982) *The Conversational Historical Present in American English Narrative*, Foris Publication.